幕末志士の投宿場～竪小路～

竪小路は参勤交代の行列が通る萩から三田尻を結ぶ道・萩往還の一部です。江戸時代の城下町萩から入ると山口町の入口にあたります。そのため江戸時代は多くの商家や旅館が並んでいました。

また文久３年（１８６３）藩庁が萩から山口に移ると藩士たちは竪小路界隈の多くの商家の部屋を借りて泊ったり、密会の場にしたりしました。

公私にわたって彼らを支えた商家の人々は、藩士たちの活躍ぶりや、あるいは突然の悲報をどのように受け止めたのでしょう。

杉助右衛門宅

宍戸九郎兵衛

杉助右衛門は竪小路界隈の町人を代表する一人で、酒造業を営んでいました。この杉家の借家が近くにあり、そこに宍戸九郎兵衛が入りました。宍戸は毛利一門で家老になれる家柄の人です。

京都や大阪の藩邸に勤め尊王攘夷運動に染まり、久坂玄瑞らの行動を応援しました。

三文字屋

国司信濃

吉田稔麿

三文字屋を営む杉山家は紙問屋元締めとして藩の行政と結びつきが濃く、藩行政の重鎮、国司信濃・中村誠一・山田宇右衛門たちが泊りました。士分を与えるときの伝達などはここで行われ、吉田稔麿・入江九一・白石正一郎などがそのために訪れました。

吉田稔麿は、吉田松陰門下で高杉晋作・久坂玄瑞・入江九一に並び松門四天王といわれた将来有望な人物でした。足軽の家に生まれましたが、尊王攘夷の活躍により士分昇格しました。また、朝陽丸事件鎮静などさまざまな調整役で多忙をきわめた稔麿ですが、ここで萩の両親にあてて手紙を書いたなどの記録が残っているので、つかの間のやすらぎの時間をここで過ごしたようです。元治元年６月５日の京都池田屋事件に遭遇し24才で短い生涯を閉じました。

文武に優れ聡明な国司信濃は21才にして実力で家老にとりたてられた人物でしたが、元治元年７月19日の禁門の変の責任をとって切腹。22才の若さでした。

十朋亭

周布政之助

来島又兵衛

十朋亭は、江戸の中期から醤油の商いで栄えた万代家の離れ座敷でした。万代家は藩からもその商才を認められ家業のかたわら「越荷方会所」（貿易品の取り扱い所）の頭取を務め、幕末の藩の軍資金集めに尽くしました。

十朋亭の最初の宿泊人は藩の重役だった周布政之助です。文久２年（１８６２）長州藩が尊王攘夷に舵をきってからは、攘夷の段取りを担う中心でした。お酒好きで有名で、血気さかんな若い藩士を相手に飲まずに寝むれない日も多かったことでしょう。

戦国武者のようだといわれた来島又兵衛は、京都進軍の許可をもとめて十朋亭に何度も訪れ、周布と激論を交わしました。

一方、英国留学していた井上馨と伊藤博文は、攘夷を止めるために元治元年６月に帰国したとき十朋亭に泊りました。藩首脳の説得に努めましたがその甲斐なく、下関で同年８月に米仏英蘭の四ヶ国の連合軍の砲撃を受け長州藩は壊滅寸前、窮地に立たされました。（下関戦争）

古見家

高杉晋作

井上馨

山県有朋

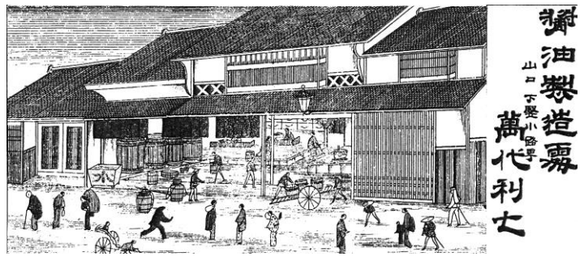
伊藤博文

古見嘉兵衛宅には、高杉晋作が泊りました。父への手紙に「万代家より三四軒上り、古見嘉兵衛と申す者のところに御座候」と記しています。

元治元年９月、下関戦争の講話会議で和議をまとめる大役を果たした晋作は、役人として石州境の軍務管轄を命じられますが、二週間で辞表を出して萩に帰りました。そのとき滞在したのが古見家です。

翌月、保守派に命を狙われた晋作は萩を脱出、襲われて重傷の井上馨を見舞いました。このときも古見家に泊ったかもしれませんが、追手がせまりここも脱出。そのときに神職に変装して逃げたとか。

山県有朋は「奇兵隊軍監として山口に滞在中は下竪小路古見嘉輔方の部屋を仮寓とす」との記録があります。



明治期山口県商工図録（M19刊行）より
右端絵：杉助右衛門の清酒醸造場
左端絵：万代家の醤油製造場

昭和30年ごろの竪小路周辺の航空写真

①元料亭菜香亭
②八坂神社
③龍福寺
④杉助右衛門宅
（現 山口ふるさと総合伝承センター）
⑤古見家跡
（現 萩山口信用金庫竪小路支店）
⑥十朋亭
（現 十朋亭維新館）
⑦三文字屋跡
⑧森脇旅館跡
⑨片岡旅館跡
⑩井関屋跡
（現 県道204号交差点）
a 伊勢小路
b 大殿大路
c 久保小路

森脇旅館

赤川敬三

久保断三

小野為八

森脇旅館には、元治元年２月２日、膺懲隊総督赤川敬三と隊士の金子文輔が泊まり、政府の前田孫右衛門を訪ねています。上京進軍して長州藩の趣意を朝廷に無理やり届ける、届けないと議論が沸騰していたころで、その話でしょう。

同年４月29日には、船木代官の久保断三が泊まりました。そこへ松下村塾以来の旧友で砲術専門家の小野為八が訪ねてきました。小野は奇兵隊諸隊と深く関わっており、これも上京進軍についての相談だったかもしれません。

片岡旅館

久坂玄瑞

入江九一

野村靖

久坂玄瑞は15歳までに家族がみな病死し天涯孤独となり、家督を継ぎました。16歳で吉田松陰門下に入り、松陰に人物を認められその妹 文と結婚しました（大河ドラマ「花燃ゆ」で有名に）。文久３年八・一八の政変で朝廷から排除された長州藩が、弁解書を家老にもたせて上京させるさいのお付きに選ばれ、出発時の同年11月４日入江九一らと片岡旅館に泊りました。

入江九一は、萩の足軽の家に長男として生まれました。吉田翔松陰門下に入ったのは22歳。冷静沈着でかつ度胸があり、暴れん坊の高杉晋作も奇兵隊の面々も九一にたしなめられると大人しくなったそうです。翌年７月の禁門の変において24歳の若さで京都御所で亡くなりました。

入江九一の弟は野村靖で初代神奈川県知事、明治政府で活躍しました。妹のすみは、伊藤博文の最初の奥さんで、伊藤と離婚後は長州藩士で大蔵省役人となる人と再婚しました。

井関屋

中山忠光

吉田松陰

井関屋は、１８３０年ごろは木材を扱う商いをしていたとの記録が残っています。

文久３年４月21日、中山忠光（公家中山忠能の子）が長州藩の庇護のもと、井関屋に案内され泊りました。

中山忠光は、攘夷派で公武合体をすすめる公家たちの暗殺を企てるなど超過激派でした。相談をもちかけられた久坂玄瑞は、このまま京都に居させては何をしでかすかわからないと判断し長州に共に下ることになりました。

吉田松陰が嘉永７年（１８５４）25歳のとき黒船来航のとき密航しようとして失敗し、罪人として国もとで塾居となり護送されました。お供した金子重之助とともに。竪小路に入ると井関屋で昼食をとりました。囚人の扱いですから土間などで食べたかもしれません。萩に帰り野山獄に幽閉され、その３年後松下村塾を開きました。

話は前後しますが、吉田松陰は17歳のとき萩から出て湯田温泉に泊ったことがあります。そのとき大内氏についての資料を書き写したり大内輝弘についてもまとめたりした手記が残っています。大内氏にも関心があったようです。

龍福寺

毛利敬親

毛利敬親は萩から山口に移ったとき、急場龍福寺を住まいとしました。その後の慶応２年（１８６６）新山口御屋形が完成すると、そちらに移りました。大河ドラマ「花燃ゆ」の舞台になっていた場所です。その当時の龍福寺は残念ながら明治14年（１８８１）にほとんど焼失しました。現在の本堂は明治16年（１８８３）に大内氏の氏寺であった興隆寺の釈迦堂を移築したものです。

八坂神社

八坂神社は、もともと山口大神宮境内にありましたが、元治元年に現在地に移転しました。祇園祭で山車や神輿が練り歩き、藩庁である新山口御屋形前が騒然となるのを避けるためだったそうです。

元菜香亭

齋藤幸兵衛

山口市菜香亭は料亭菜香亭を移築したもので、明治10年（１８７７）に八坂神社境内に開業しました。主人齊藤幸兵衛は、敬親の料理番として萩から山口に移り、明治維新以降自分で店を構えました。ここには幕末を生き抜いた伊藤博文、井上馨、山県有朋、野村靖らが来亭し、その時書いた書が大広間にならんで掲げられ、当時の人々の心意気を墨跡に感じることができます。

西の菜時記

令和元年7月31日発行
第53号
発行元：山口市菜香亭
指定管理者
特定非営利活動法人
歴史の町山口を甦らせる会

西の菜時記

令和元年7月31日発行
第53号
発行元：山口市菜香亭
指定管理者
特定非営利活動法人
歴史の町山口を甦らせる会